



TITLE:

奇形歯の形態病理学的研究とくに  
上顎大臼歯多歯根症について(  
Abstract\_要旨)

AUTHOR(S):

杉立, 馨

---

CITATION:

杉立, 馨. 奇形歯の形態病理学的研究とくに上顎大臼歯多歯根症について. 京都大学, 1962, 医学博士

ISSUE DATE:

1962-06-19

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/210913>

RIGHT:

氏 名	杉 立 馨 すぎ たつ かおる
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 記 番 号	論 医 博 第 3 2 号
学位授与の日付	昭 和 37 年 6 月 19 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	奇形歯の形態病理学的研究 とくに上顎大臼歯多歯根症について

論文調査委員 (主 査) 教授 鈴 江 懐 教授 美濃口 玄 教授 岡本 耕造

### 論 文 内 容 の 要 旨

人の歯の奇形の一種に異常根があり、そのうち最もしばしばみられるものに過剰根の出現がある。これは口腔病理学的には多歯根症と呼称され、乳歯には稀有であり、永久歯では頻度の差はあるがほとんどの歯種に発現する。ところが、従来上顎大臼歯多歯根症についての幾多の報告はあるが、多数例について形態病理学的研究を試みたものはきわめて少い。そこで著者は、大阪歯科大学口腔病理学教室所蔵の抜去歯の中から多根性上顎大臼歯を選出し、これらを次のように分類した。

すなわち、5根性大臼歯4例、5根性化傾向の4根性大臼歯5例、4根性大臼歯92例、5根性化傾向の3根性大臼歯2例、4根性傾向の3根性大臼歯61例である。そして総計164本について、肉眼的、レ線的ならびに小野氏歯髓腔内墨汁浸潤歯牙透明法などによって詳細な観察を行ない、形態学的ならびに病理学的にはもちろんのこと、临床上にも関連のある幾多の興味ある知見を得た。その成績の概要を摘記すると次のようである。

- 1) 上顎大臼歯多歯根症の歯の各部の計測値と重量は、ほぼ平均値の範囲内に属するものが多く、正常歯に比し普通ないしはやや劣勢であった。
- 2) 根の分岐部位は高位および中位が多く、口蓋側において2根をもつものは、歯頸部から直ちに分岐するものが多く、また近心側での分岐部位は遠心側での分岐部位よりも低位のものが多かった。
- 3) 頰側に発現する根は癒合傾向が強く、とくに P. R. は頰側近心根と癒合傾向が強い。
- 4) 根の走向は総じて遠心傾斜をなすものが多いが、口蓋根は口蓋側へ、口蓋側近心根は近心傾斜するものが多い。
- 5) 根尖の方向は正常歯に比し著変は少ない。
- 6) 根側面における帯状溝（發育溝）の発現は、完全分岐の根は低調であるが、不完全分岐の根はかなり著明に発現し、とくに頰側近心根では著明なものが多いことがわかった。
- 7) 歯根の表面性状はおおむね尋常で、Hypoplasie としての所見は少ない。

- 8) 歯冠は4咬頭性のものが多く、各咬頭や隆線の発育は正常歯に比べ著変は少ない。
- 9) 異常結節の種類は臼旁結節、臼後結節およびカラベリー結節であり、そのうち臼旁結節は1個をもつものが多く、カラベリー結節は2個をもつものがかなり多かった。
- 10) 歯冠の表面性状では白斑、着色および表面の粗糙なものが若干例にみられ、計測値だけでなく、これらの点からも正常歯に比し優形成でなく、むしろ劣形成である。
- 11) 歯冠各部と過剰根との関連性については、過剰結節がある場合にはそれに対応して過剰根が発現することが多く、また、口蓋側に発現する過剰根は頰側近心根の分岐によるものが多く、これは近心辺縁隆線の発育が著明なものや、近心に突隆著明なものや、近心辺縁結節を有したり、カラベリー結節をみとめたり、口蓋面が頰面より近遠心的に広大なものなどに発現しやすいことが判明した。
- 12) 歯髓腔の形態については、最も複雑な形態を呈するものは頰側近心根管であり、その他のものは単純根管が多い。また、過剰結節および過剰根を髓伴するものでは、それらの髓腔がほとんどの症例において、固有の髓室や根管と連絡を保っていることが判明した。
- 13) 上顎大臼歯多歯根症の成因については、系統発生学的には復古形と考えられるものや、単なる歯胚の分裂ないし異常発育によると考えられるものや、また歯胚と顎骨との関連性に基因すると思われるものなど区々で、今後なお一層の追究が必要と考えられる。

## 論文審査の結果の要旨

人類の上顎大臼歯にはいろいろの場合にいわゆる異常歯ないし奇形歯の出現することが知られている。著者はこれらのうち、比較的多く観察される多歯根症についての系統的研究を企画した。これは一には、このような過剰根の成因について宗族発生学的の立場にもとづく Atavismus とす考説があるのに対し、他方また、個体発生学的に歯胚の分裂ないし発育異常によるとする所論などもあり、未だなお定説を見ないで、これらの分野において、なんらかの手掛りを得んとして検索を進めたのである。

今までに人類の大臼歯に現われる過剰根についての研究発表は少なくはないが、多歯根症の本態の究明を企画したものはまれで、わずかに大阪歯科大学内藤の多岐根犬歯、吉田の切歯多歯根症の形態病理学的研究業績があるに過ぎない。そこで著者は長年にわたり蒐集保存されていた164歯という多数の本症例について各種の方面から詳細な検討をとげ、従来の知見のおよばざるところを補遺せんとしたのである。

観察した164歯については、歯牙各部の計測値と重量、根の分岐部位、根の癒合傾向、根の走向、根尖の方向、根側面の带状溝、歯根の表面性状、歯冠の形態、歯髓腔の形態などにつき詳細な記載を試みたのである。そうして上顎大臼歯多歯根症の成因については、宗族発生学的には復古形と考えられるものや、単なる歯胚の分裂ないし異常発育によると考えられるものや、また歯胚と顎骨との関連性に基因するものなど区々であることを断定した。

以上は不明であった人類多歯根症の成因につき、有力な確実な指標を与えたものである。したがってこの論文は医学博士の学位論文として価値あるものと認定する。